

Part 2

クルレンツィスとゲルギエフのオペラ『イドメネオ』、『シモン・ボツカネグラ』

取材・文 中東生
Text=Shinobu Naka

「パッション」の乏しかった

クルレンツィスの『イドメネオ』

2019年のザルツブルク音楽祭は、「古代神話への共感を呼び覚ましたい」というテーマで7月20日から8月31日まで開催された。5つの新演出オペラの中から、最初の演目のモーツァルト『イドメネオ』と、最後に初日を迎えたヴェルディ『シモン・ボツカネグラ』をレポートしたい。

芸術監督のマルクス・ヒンターホイザーに説得され、昨年、ベートーヴェンの交響曲全曲演奏を敢行したテオドール・クルレンツィスは今年、2017年と同じビーター・セラースとのコンビで、オペニング・オペラ『イドメネオ』を任された。2年前も同じくモーツァルト『皇帝ティートの慈悲』だったが、今回大きく違うのは、クルレンツィスが生み育てたムジカエテルナではなく、フライブルク・バロック・オーケストラがピットに入るといふ点だ。

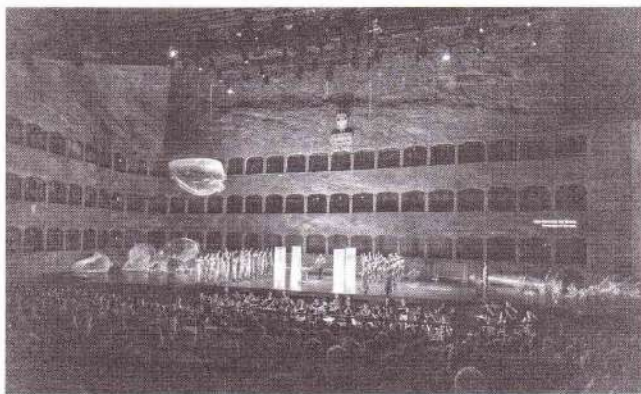
セラースはこの演出を通して、人類共通の問題である地球環境に警鐘を鳴らしたいのだという。その発信地として「ダ

ヴォス公議より最適なのは当音楽祭」だと語る。*（世界経済フォーラムが毎年1月にスイスのダヴォスで開く年次総会）

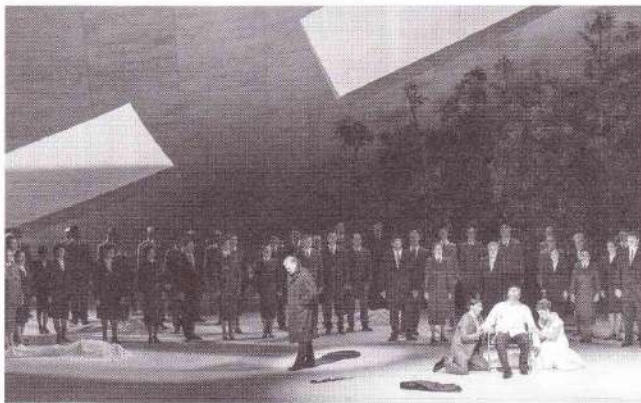
舞台上に置かれた透明の巨大な「海の生物たち」。トロイア人は土色の、クレタ人は海色の戦闘服という現代的なヴィジュアルに、くぐもったような生温かい古楽器の音がマッチしない。トロイア人は現代の難民を体現しているが、その王女イリア役のイン・ファンは無垢な声を自

在に操れる声楽的技術は持つてはいるものの、クルレンツィスが指を使って音楽を揺らそうとしても、何の揺らぎも見せず歌い続けるなど、体温が感じられない無機質な歌手だ。イダマンテのポーラ・マリーはクルレンツィスが気に入って、ベルミのディアキレフ・フェステイバルにも引く張って来たアイルランド人メゾソプラノだが、その「冷たさ」を溶かすほどのパワーはない。イドメネオのラッセ

ル・トーマスは、声にも舞台姿にも主役や王としてのオーラがない。全員がイタリア語が不明瞭なせいもあり、血が通っていない印象を与える。



期待されたクルレンツィスの『イドメネオ』だったが……
© Salzburger Festspiele / Ruth Walz



「海風」が感じられそうな風景が広がり、回り舞台が効果的に使用された『シモン・ボツカネグラ』
© Salzburger Festspiele / Ruth Walz

それだからか、それとも「一音一音、細部まで緻密なオーケストラ稽古を経た」上での7回目の公演を（8月19日）聴いたからだろうか、立奏で奮闘したオーケストラにも、クルレンツィスお得意の「パッション」が乏しかった。バロック的アプローチで細部までこだわりすぎて、『イドメネオ』の高貴な美しさが発揮されるメロディ・ラインが輝きを放つ部分が少ないのだ。また、レクタティヴ・ヴォ・セッコの大半を含む多くのカットを施したためか、息子を殺めなければならぬイドメネオの葛藤や、ようやく出会った父親に受け入れられないイダマンテの絶望感等、主軸となる心情も伝わらなかった。

終盤になってようやく「意図的に長時間クルルに抑えていたのか」と思えるほどのパッションが滲み出はじめる。イダマンテの最後のアリアでは「題名を『イダマンテ』にしたい」と思うほど。最後はエレットラ役のニコル・シュヴァリエが終幕のアリアで今宵の主役となった。